

令和 6 年 6 月 14 日現在

機関番号：34513

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K03058

研究課題名（和文）病棟保育における保育プロセスの質評価スケールと保育実践の手引きの作成

研究課題名（英文）Creation of a "Practical Guide of Childcare for 2 - 5 Years Old Hospitalized Children"

研究代表者

谷川 弘治 (Tanigawa, Koji)

神戸松蔭女子学院大学・教育学部・教授

研究者番号：80279364

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 900,000円

研究成果の概要（和文）：病院に入院する幼児を対象とする病棟保育実践の質を向上させるため、病棟保育に適した実践評価ツールを柱とする『実践の手引き』の作成を目的とした。入院する幼児の保育実践記録の分析によって作成された実践評価ツール案を保育士に使用していただく使用感調査の結果を踏まえ、最終的に病棟保育実践の計画立案、実施、評価のツール『病棟保育ポートフォリオ』とその解説書『病棟保育ポートフォリオ 子どもと保育士のあゆみ 解説』を完成させた。今後は、これらの普及を進め、さらなるブラッシュアップを図っていきたい。

研究成果の学術的意義や社会的意義

病棟保育実践過程のエピソード記録を用いて、入院する幼児と保育士のやりとりを詳細に分析、整理し、状況に応じた保育士の判断と選択されたスキルをリストアップした研究はほかにない。このデータを用いることで、保育実践立案のための、情報収集、アセスメント、目標の設定、そして保育内容の選択までを、総合的に捉えることが可能となった。そのことは、保育実践の振り返りを容易にするものでもある。このようにして作成された実践支援ツールは、病棟保育実践の質の維持向上に役立つだけでなく、病棟保育に対する他職種の理解を得ることに貢献すると思われる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to create a "Practical Guide of Childcare for 2 - 5 Years Old Hospitalized Children". We made a draft of "Practical Guide" based on the result of qualitative data analysis of episode records of childcare practices for hospitalized children. Next, a survey for the childcare workers who were requested to use this draft of "Practical Guide" were performed. Finally, based on the result of this survey, we completed the "Practical Guide".

研究分野：特別支援教育・医療保育

キーワード：病棟保育 保育実践の質保障 幼児期の入院 保育アセスメント 個別保育計画 プロセス評価 保育ポートフォリオ PDCA

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

1. 研究開始当初の背景

病棟保育とは、病院に入院中の子どもとその家族に対する専門的な保育をいう。医療保育は、病棟保育を含め、医療を要する子どもと家族に対する専門的な保育である。対話とは、幼児と保育士、家族と保育士の意図をもった言語的・非言語的サインによる相互作用の過程をさす。病棟保育において保育計画は、子どもと家族と出会ってからの対話の過程を通して明確化され、保育計画に基づく保育実践も対話の過程を通して微調整される。病棟保育における保育プロセスの質は、対話過程を通して維持・向上が図られる。

1) 医療保育の動向

2002(平成14)年度より医療保険の診療報酬「小児入院医療管理料」に保育士等加算が導入され、保育士を導入する病院が増加した。これに伴い病棟保育をはじめ医療を要する子どもとその保護者に対する専門的な保育の質の一層の向上が課題となってきた。2007(平成19)年より日本医療保育学会において「医療保育専門士」認定制度がスタートし、2019(令和1)年10月現在登録数は181名である(医療保育学会ホームページ、2019年10月19日参照)。本資格認定制度に合わせて医療保育専門士研修テキストが作成され、2016(平成28)年に改訂版が公刊された(日本医療保育学会編：医療保育セミナー・建帛社、2016)。医療保育の専門性、倫理性は共有しうるものとなり、医療保育実践の質を深めていく理論的基盤が整備された。一方、医療保育の場は多職種で構成され、保育士の役割に対する職場の理解は多様である。保育実践の質向上は、対象である子どもと家族のウェルビーイングを高めることはもちろん、保育に対する職場の理解を向上させるためにも欠かせないものとなっている。

2) 医療保育実践の質保障の研究

保育実践の質を高めるには、その結果の評価に加え、保育プロセスの質を評価することが欠かせない。淀川・秋田によれば、保育過程及び子どもの発達と成果を評価するスケールは、保育者の取り組みから出発するもの、保育者と子どものかかわりに焦点を絞り、保育者の取り組みから出発するもの、子どもの経験から出発するものがある(シラージほか：保育プロセスの質評価・明石書店、2016)。

病棟保育は、日々新たな対象との出会いが続く、対象の個別性が大きい、入院の短期化により保育課題は限定される、日々の症状などの変化に対応しなければならないなどの特性を有する。保育士は子どもとの対話を通して、子どもの時々の変化を受け止めながら保育の方向性を定め、また調整しなければならない。そのため研究代表者らは、淀川・秋田らがとして取り上げた保育者と子どものかかわりに焦点を絞り、保育者の取り組みから出発する手法を採用、入院幼児と保育士の対話の質の変化に焦点づけて保育プロセスの質評価が可能かを検討してきた(谷川弘治：病棟保育における実践過程の評価について—対話モデルによる分析試論・医療と保育、16(1)、8-16、2018、小野玲奈・谷川弘治：病棟保育における実践過程の評価に関する研究—エピソード記録の分析による「対話の質」と「保育士の技」の相互関係の検討—第23回日本医療保育学会総会・学術集会、2019、谷川弘治・小野玲奈：病棟保育における実践過程の評価に関する研究—対話モデルに基づく2-5歳児のエピソード記録の分析・医療と保育、18(1)、8-16、2020)。

その結果、はじめての入院を経験した幼児に対して保育士は安心を提供し、応答的な対話が成立するよう保育を展開し始め、その後、子どもの病状や安静度の変化などに加えて、対話の質の変化を考慮して保育内容と方法を選択し、調整していることが明らかとなった。これらの知見は、病棟保育における情報収集、保育アセスメント、個別保育計画の立案と実施の過程を対象化し、評価する視点を提供するものと考えられた。

2. 研究の目的

本研究は、病棟保育実践の質保障ツールとして、病棟保育の特性を踏まえた保育プロセスの質評価スケール(幼児期版)と保育実践の手引きを作成、公表することを目的とする。具体的にはつぎのA、B、Cの作成、公表を進めることとした。

目的A エピソード記録の充実した実践記録を得て、「入院中の幼児と保育士の対話の質の判定システム」及び「保育士が選択した技の意図レベルでの13分類」をブラッシュアップし、病棟保育用保育プロセスの質評価スケール(幼児期版)を作成する。

目的B 目的Aに保護者と保育士の対話過程、医療スタッフとの協働過程の評価スケールを加え、総合的な保育プロセスの質評価スケール(幼児期版)とする。

目的C 以上の知見を基盤として病棟保育用の保育実践の手引きを作成する。

3. 研究の方法

当初、下記の3つの研究方法で進める予定であった。

方法1 研究代表者らがこれまでに得てきた知見を検証しブラッシュアップを図るために、あらかじめ設定したエピソード記録の記載要件に基づく、幼児期(2から5歳)の病棟保育の実践記録を新たに得て、「入院中の幼児と保育士の対話の質の判定システム」の精緻化、

「保育士が選択した技の意図レベルでの13分類」の精緻化，対話の質の水準を含む時々の状況の見立て，保育スキル選択の適切性など，病棟保育用保育プロセス評価スケールを作成する。

方法2 実践記録における保護者との対話過程と医療スタッフとの協働過程（情報交換や医療スタッフの保育プロセスへの参加促進など）を検討し，これを(A)のスケールに加え，総合的な保育プロセスの質評価スケール（幼児期版）とする。

方法3 上記で得られたデータを基礎として，病棟保育用の保育実践の手引きを作成する。

Covid-19のパンデミックは，本研究課題のフィールドである医療機関に大きな影響を与えた。経過は次項に詳述するが下記のように方法を変更した。

対話の質の判定システム，保育士のスキルのブラッシュアップを含む「総合的な保育プロセスの質評価スケール（幼児期版）」について，研究資料のさらなる分析と研究者らの経験に基づく仮説提示に基づいてプロトタイプ（A）を作成する。

「総合的な保育プロセスの質評価スケール（幼児期版）」の解説を作成し，「病棟保育用の保育実践の手引き」のプロトタイプ（B）とする。

Covid-19の医療機関への影響をみながら，医療現場の保育士の協力を得て，プロトタイプ（A）（B）の使用感を把握，「総合的な保育プロセスの質評価スケール（幼児期版）」（目的A，B）と「病棟保育用の保育実践の手引き」（目的C）を完成させる。

4. 研究成果

1) Covid-19の影響を背景とする研究方法の見直しと研究経過

本研究課題の研究期間はCovid-19のパンデミックに対する社会的対応を要する時期と重なり，小児医療と病棟保育を含む医療体制全体が深刻な影響を受けた（医療保育活動への影響については，次の文献を参照のこと。奥田早苗・安部信吾・金城ヤス子・ほか：新型コロナウイルス感染症による医療保育活動への影響と支援の方向性を探る-日本医療保育学会会員の意識及びニーズ調査。医療と保育，20（1），88-98，2022）。本研究においては，目的A，Bを達成するための方法1，2を実行に移せない状況が長く続いた。Covid-19の医療機関への影響は長期にわたることが予測されたため，医療機関に負荷をかけない方法を模索した。

Covid-19による医療機関の状況を踏まえ，医療機関と病棟保育士にとって負荷の少ない方法として，「プロセス評価セット」の使用感調査を企画した。使用感調査は，協力の得られた病棟保育士が「プロセス評価セット」試用版を試用し，使用感をアンケート形式で回答する。入院中の幼児と家族の個人情報，回答者である保育士の個人情報は，それを研究組織が入手することがなく，「プロセス評価セット」の役立ち感，負担感，改善点等を把握できる。

使用感調査に向けて，研究組織内外の専門家の意見聴取を行い，構成・内容等の更新を進めた上で，使用感調査に向けて準備を進めることとした。その結果，試用版として『病棟保育実践のプロセス評価表』ver.3.0（エクセル版と紙面記録版）及び『病棟保育実践のプロセス評価表 解説』ver.3.2，さらに使用感を回答するアンケート用紙等を作成，これらの使用感調査について研究代表者の所属機関の研究倫理委員会の承認を得た（2021 松蔭研倫-015）。その後の経過は表1に示した通りである。

表1 プロトタイプA，Bの主なブラッシュアップ過程（倫理審査受審時以後）

| セット | 名称（柱） | 形式 |
|-------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------|
| 2021年度末倫理審査受審時 | 『病棟保育実践のプロセス評価表』ver.3.0 エクセル版，誌面記録版 個別保育計画欄1頁，プロセス評価欄3頁で構成。評価軸は14項目を設けた。 | A4判 4頁 |
| | 『病棟保育実践のプロセス評価表 解説』ver.3.2 「記入の仕方について」動画付 1. プロセス評価の目的，2. プロセス評価の柱，3. 表が念頭に置いている対象児，4. 本評価表の構成と記載方法，5. 評価の手順，で構成 | 冊子はA4判 14頁 解説動画を添付 |
| 試用版倫理審査変更申請 | 『子どもと保育士のあゆみ（病棟保育ポートフォリオ）』ver.4.3 誌面記録版のみ ボンチ絵1頁，『子どもと保育士のあゆみ』の役割・構成・使用方法2頁，個別保育計画欄2頁，あゆみの記録欄9頁で構成。評価軸はver.3.0と同じ14項目である。記載欄を大きくすることで，書き込みやすくした。 | A4判 14頁 紙面記録版に絞る |
| | 『子どもと保育士のあゆみ（病棟保育ポートフォリオ）解説』ver.4.3 1. 『子どもと保育士のあゆみ』の役割，2. プロセス評価について，ボンチ絵，3. 対象児，4. 『子どもと保育士のあゆみ』の構成，5. 記入方法，6. 『子どもと保育士のあゆみ』に関する詳細（記入方法の詳細），注記で構成。動画も添付 | 冊子はA4判 18頁 |
| 調査後の大幅改定版様式を大幅に変更 | 『子どもと保育士のあゆみ（病棟保育ポートフォリオ）』ver.5.32 個別保育計画欄とあゆみの記録欄の項目を統一。子どもと家族の情報，ニーズ，「自分らしさの指標」については計画欄だけでなく，振り返りができる。評価軸は計画段階から活用できるよう「保育課題」と名称変更し17項目に増やした。また，「めざす子どもの姿」と「保育の柱」を組み合わせで記述するなど，子どもが主体であることを意識できるようにした。 | B4判 1枚 2頁 |
| | 『子どもと保育士のあゆみ（病棟保育ポートフォリオ）解説』ver.5.3x-3 大きく，『子どもと保育士のあゆみ（病棟保育ポートフォリオ）』の役割，視程，構成，記入方法 プロセス評価の理論的な解説 注記 | A4判 26ページ |
| 最終版 | 『病棟保育ポートフォリオ』ver.6 よりきめ細かく記入できるレイアウトとするためA3判とし，保育課題等の表現をより適切にした。 保育課題17項目の各々の「保育の視点（情緒の安定と生命の保持，健康，環境，言葉，表現，人間関係など）」を明確に示した。 | A3判 1枚両面 2つ折りでのA4判 4ページ |
| | 『病棟保育ポートフォリオ 子どもと保育士のあゆみ 解説』ver.6.x 役割，視程，構成，記入方法 個別保育計画を構成するための詳細 試用版の検証結果の掲載 | A4判 25ページ |

(1) 2022 年度

保育士がイメージしやすい名称を考慮して『病棟保育実践のプロセス評価表』は『子どもと保育士のあゆみ(病棟保育ポートフォリオ)』、『病棟保育実践のプロセス評価表 解説』は『子どもと保育士のあゆみ(病棟保育ポートフォリオ)解説』とした。そのほか、分かりやすさ、書きやすさなどの向上に努めた。ただし『病棟保育実践のプロセス評価表』は紙面記録版のみとした。エクセル版の医療現場での管理は難しいと判断したためである。こうして「プロセス評価セット」のバージョンを 4.3 に更新し、神戸松蔭女子学院大学研究倫理委員会への変更申請承認後に使用感調査を実施した。

本調査の研究参加者を、「急性期の子ども(2 から 5 歳)、あるいは慢性疾患のある子ども(2 から 5 歳)を担当する病棟保育士であり、インフォームドコンセントの手続きにより研究参加に同意したものと定義し、縁故法を用いて研究参加を得た。その結果、6 名の研究参加者から回答を得て「プロセス評価セット」の役立つ点、改善点等を把握することができた。

研究参加者は「プロセス評価セット」を用いて保育実践を実施した上でアンケートに回答するため、ある程度以上の時間が必要であったことから、本研究の研究期間の 1 年延長を申請し、認められた。

(2) 2023 年度

調査結果を受けて「プロセス評価セット」の改善に着手した。『子どもと保育士のあゆみ(病棟保育ポートフォリオ)』を大幅に見直し ver.5.32 とした。その結果、使用感調査で用いた ver.4.3 よりコンパクト(A 4 判 14 頁から B 4 判 2 頁)でありながら、内容は単なる「プロセス評価のツール」ではなくなった。その理由は下記の通りである。

『子どもと保育士のあゆみ(病棟保育ポートフォリオ)』ver.5 の各頁の左半分は「個別保育計画」欄であるが、本格的な計画作成ツールとした。つまり、「子どもと家族に関する重要な情報」「子どもと家族のニーズ」「自分らしさの指標」「めざす子どもの姿(保育の柱)別の保育課題」「保育課題別の保育計画」を系統的に検討の上、記録できる。

『子どもと保育士のあゆみ(病棟保育ポートフォリオ)』ver.5 の各頁の右半分は「あゆみの記録」欄であるが、「個別保育計画」欄のすべての項目について振り返り、情報の見直しや追加、当初の見立て(ニーズ・自分らしさの指標・保育課題の選定)と保育計画の達成度や妥当性の検討、新たなニーズ等の発生への対応の妥当性などを検討の上、記録できる。

プロトタイプにも、「個別保育計画」欄としてアセスメントや保育計画を書き込む欄を設定していたが、「プロセス評価」欄の構成を細かくし、「個別保育計画」欄の自由度は高くした。「個別保育計画」の立案は現場による多様性があることを考慮したためである。しかし、使用感調査の結果は、情報収集・アセスメント・計画立案から振り返りまで、統一された視点を明確に示す方が、保育士には受け入れやすいことを示唆していた。

新しいバージョンでは、さらに「子どもらしさの指標」を導入したほか、保育課題を「めざす子どもの姿」によって分類する視点を加えるなど、子ども主体の計画立案と評価を強く意識するように改訂した。

こうして『子どもと保育士のあゆみ(病棟保育ポートフォリオ)』が系統的な病棟保育計画から評価までを視野に入れるものとなったため、その解説『子どもと保育士のあゆみ(病棟保育ポートフォリオ)解説 ver.5.3x』も、『病棟保育の手引き』としての質を有するものとなった。

その後、研究組織内では、これら新しいバージョンについて、保育学、小児看護学等の立場から詳細な見直しを図り、17 ある「保育の課題」の各々について、「保育の視点」つまり、情緒の安定と生命の保持、健康、環境、言葉、表現、人間関係、地域連携、保護者支援、チームアプローチ、を明確に示したうえで、『病棟保育ポートフォリオ ver6.0』、及び『病棟保育ポートフォリオ 子どもと保育士のあゆみ 解説 ver6.x』を完成させ、これを最終バージョンとした。

前者は、目的 A、B に対応し、後者は目的 C に対応するものである。

2) 臨床応用に向かう研究のための示唆と謝辞

Covid-19 のパンデミックから始まった本調査研究は、入院中の幼児のウェルビーイングの向上に役立つことはもちろん、医療現場における諸状況に柔軟に対応しながら保育実践を探究する保育士をはじめとする医療従事者にとって、ツール使用の有用感、有意味感、処理可能感を最大限尊重すべきであることを、私たちに強く求めて来た。その結果、最終作成物は、大幅に改良され、簡素であるが、保育実践の過程全体をサポートするものとなった。もちろん、その成果には、本来の研究目的の達成が含まれている。しかし、臨床応用を進める研究においては医療現場と共に歩むため、医療現場の現実とニーズに対する研究者の共感性を高めること、保育現場とのコミュニケーションを維持すること、可能な範囲で保育現場へのサポートを行うことが、最低限の条件であると再認識させられた。

困難な中にもかかわらず本研究に協力してくださったすべての方々に深く感謝を表したい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

| | |
|----------------------------------------|-----------------------|
| 1. 著者名 谷川弘治 | 4. 巻 45(6) |
| 2. 論文標題 楽しく育つ入院環境をつくる 保育士の立場から 総論 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 小児看護 | 6. 最初と最後の頁 699-701 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|-------------------------------------------------------------|--------------------|
| 1. 著者名 谷川弘治, 小野鈴奈 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 病棟保育における実践過程の評価に関する研究-対話モデルに基づく2-5歳児のエピソード記録の分析- | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 医療と保育 | 6. 最初と最後の頁 8-16 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 2件/うち国際学会 0件）

| |
|------------------------------------------------------------------------------|
| 1. 発表者名 谷川弘治, 小野鈴奈, 吾田富士子, 林典子, 及川郁子 |
| 2. 発表標題 病棟保育実践のプロセス評価ツール『子どもと保育士のあゆみ（病棟保育ポートフォリオ）』の開発 - 試用版の使用感アンケートによる検証 |
| 3. 学会等名 第27回日本医療保育学会学術集会 |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|------------------------------------------|
| 1. 発表者名 谷川弘治 |
| 2. 発表標題 子どもの笑顔に導かれて - 医療保育実践の質保障の視座 - |
| 3. 学会等名 第25回日本医療保育学会総会・学術集会（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|------------------------------------|
| 1. 発表者名 谷川弘治 |
| 2. 発表標題 病気の子どもと保育士の対話の質を高める |
| 3. 学会等名 日本医療保育学会関西ブロック研修会（招待講演） |
| 4. 発表年 2020年 |

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|------------------------------------------------|-------------------------------------|----|
| 研究分担者 | 林 典子 (Noriko Hayashi) (00620444) | 帝京平成大学・人文社会学部・講師 (32511) | |
| 研究分担者 | 吾田 富士子 (Fujiko Azuta) (10310111) | 藤女子大学・人間生活学部・教授 (30105) | |

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|-------|-----------------------------|-----------------------|----|
| 研究協力者 | 及川 郁子 (Oikawa Ikuko) | | |
| 研究協力者 | 小野 鈴奈 (Ono Reina) | | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|---------|---------|